「共通テスト」を受験する人対象の対策講座です。

「共通テスト」は、「知識・技能や思考力、判断力を問う」とされ、複数の資料を読み比べたり、生徒同士や教師と生徒たちとの会話文を素材としての問題が出題されたりします。

それらの問題も本講座で扱いますので、しっかり取り組んでいきましょう。

とは言え、古文や漢文を正しく読解するために必要な学力は、どの大学だろうが、共通テストだろうが、変わらず同じです。

古文であれば、「重要単語」と「古文文法」などの読解のための土台や、「基本的な読解ルール」、「古文常識」を理解できていなければ読めません。漢文であれば、「語順」や「置き字」などの土台と「重要句法」、重要単語や頻出の「読み」などを押さえる必要があります。

本講座では、これらは既に理解できているものとして授業を行いますので、それらが未学習の場合は、先に「高1・2古文〈読解編〉」「高3スタンダードレベル古文〈読解編〉」「高1・高2・高3漢文」などの講座を受講してから、本講座を受講してください。

それでは、共通テストで古文・漢文も得点源になるように、一緒に頑張っていきましょう！

岡本　梨奈

予復習・授業の受け方について

各講の動画を見る前に、必ず該当の講の予習を（辞書など使わず自力で）してください。
制限時間は各大問につき古文二十分、漢文十五～二十分を目安に実施してください。
ただし、自身の戦略が既に立っている人は、自分が決めた時間配分を目安に実施しましょう。
また、万一、目標時間内に解けなかった場合は、そのまま最後まで納得いくまで解ききってください。そして、現状何分かかったのかを確認すること。どれくらいオーバーしてしまったのかを把握して、目標時間内に解ききるためにはあと何分縮めなければいけないのかを意識してください。
予習が終わったら、なるべく時間をあけずに該当講義の動画を見てください。
講義を見終えたら、復習を必ずしましょう。間違えた問題があれば、何が原因で間違えたのかを各自で分析して、そこを潰していきましょう。ちなみに、目標時間内に解けない人の原因の多くは、「単語」や「文法」の意味が出てくるのに時間がかかりすぎなことが挙げられます。「理解はできているけれど、出てくるのが遅い」という状態だと、やはり時間がかかってしまいます。秒速で出てくるくらいに何度も復習しましょう。
それらができているのに時間がかかる場合は、選択肢を横に読み比べるスピードや、要領の良い解き方ができているかどうかなど、さまざまな原因が考えられますので、どこで手間取ってしまったのかをご自身で分析してください。
あと、復習の際に再度選択肢を見て、誤答選択肢の「どこが間違いなのか」がわかるかどうか、どういうひっかけにしているかなども意識して分析してみてもよいでしょう。
本講座をすべて受講した後は、共通テスト用の演習問題をどんどん解いてください。
もちろん過去問も良い演習になりますので、本試験も追試験も手に入る分は必ずチャレンジしましょう。

目次

古文
第１講　古文対策　その１……p1
第２講　古文対策　その２……p17
漢文
第３講　漢文対策　その１……p31
第４講　漢文対策　その２……p43

第1講　古文対策　その1

第4問

次の文章は、いずれも物語の一節で、【文章Ⅰ】は『在明の別』、【文章Ⅱ】は『源氏物語』若菜下の巻である。これらを読んで、後の問い（問1〜3）に答えよ。（配点　45）

【文章Ⅰ】　右大臣の娘である大君は、夫である左大臣の子を妊娠している。一方、右大臣の妹である女君は、かつて契りを交わした左大臣との関係が途絶え、苦悩を深めていた。そのころ、大君が病になり命が危うくなったため、僧が呼ばれて祈禱をすることになった。

山の座主（注1）、慌て参りたまへり。御枕上に呼び入れきこえて、右の大臣、御手をすりて、仏にもの申すやうに、「ただ、いまひとたび、目を見合はせたまへ。あまたはべる中に、何の契りにか、(ア)いはけなくよりたぐひなく思ひそめはべりにし闇（注2）を、さらに晴るけ（注3）はべらぬ」と、泣きまどひたまふに、いと静かに数珠押し揉みたまひて、「令百由旬内（注4）、無諸衰患」と読み a たまへる御声、はるかに澄みのぼる心地するに、変はりゆく御けしき、

メモ欄

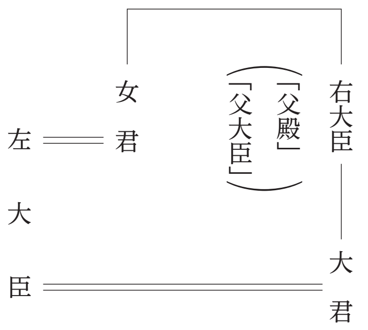
いささか直りて、目をわづかに見開け(あ)たまへり。あるかぎり、(イ)なかなか手まどひ(注5)をして、「誦経(ずきやう)よ、何よ」とまどひたまふに、なほ心ある人とも見えず、御かたちも変はりたるやうにて、その人とも見えたまはず。いとにほひやかにけ近きものから、妬(ねた)げなるまみのけしき、左の大臣はさやうにも分(わ)きたまはず、父殿ぞ、いとあやしう、「思ひかけぬ人にも似たまへるかな」と心得ず思(おぼ)さるるに、うちみじろきて、

さまざまに朝夕こがす胸のうちをいづれのかたにしばし晴るけむ

とのたまふけはひ、いささかその人にもあらず、違(たが)ふべくもあらぬを、父大臣のみぞ、かへすがへす「あやし」と傾(かたぶ)かれたまふ。

さて、わが御心おはせねば、また消え入りつつ、さらにとまるべくもおはせぬを、「今はけしう b おはせじ」とおし静めつつ、いたく嗄(か)れたる御声やめて、薬師(やくし)(注6)の呪(ず)をかへすがへす読みたまふに、御もののけ現れ出(い)でて、小さき童(わらは)に駆り(注7)移されぬ。(ウ)呼ばひののしる声に、今ぞ

【人物関係図】



メモ欄

御心出で来るにや、人々のまもり<u>Cきこゆる</u>を、「はしたなし」と思して御衣（ぞ）を引きふたぎたまふ。

（注）
1　山の座主――比叡山延暦寺（ひえいざんえんりゃくじ）の最高位にある僧。
2　闇――子を思うあまりに分別を失う親心のたとえ。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰（ごせん）和歌集』）による。
3　晴るけ――下二段活用動詞「晴るく」の連用形。
4　令百由旬内、無諸衰患――『法華経（ほけきょう）』の一節。周囲から衰えや患いをなくすという内容。
5　手まどひ――慌てふためく様子。
6　薬師の呪――薬師如来の力によって病気を治す呪文。
7　駆り移されぬ――「駆り移す」は、もののけを病人から離して他の人に乗り移らせること。

メモ欄

【文章Ⅱ】　光源氏（本文では「院」）は、病になり生死の境をさまよう妻を救おうとしている。その病には、かつての光源氏の恋人であり、今は亡き女性が関わっていた。

院も、「ただ、いまひとたび、目を見合はせたまへ。いとあへなく限りなりつらむほどをだにえ見ずなりにけることの悔しく悲しきを」と思しまどへるさま、とまりたまふべきにもあらぬを見たてまつる心地ども、ただ推しはかるべし。いみじき御心のうちを仏も見たてまつりたまふにや、月ごろさらに現れ出で来(こ)ぬもののけ、小さき童に移りて呼ばひののしるほどに、やうやう生き出でたまふに、うれしくもゆゆしくも思し騒がる。

いみじく調(てう)(注8)ぜられて、「人はみな去りね。院一(ひと)ところの御耳に聞こえむ。おのれを、月ごろ、調じわびさせたまふが情けなくつらければ、同じくは思し知らせむと思ひつれど、さすがに命もたふまじく身をくだきて思しまどふを見たてまつれば、今こそかくいみじき身を受けたれ、いにしへの心の残りてこそかくまでも参り来たるなれば、ものの心苦しさをえ見過ぐさで、つひに現れぬること。さらに知られじと思ひつるものを」とて、髪を振りかけて泣くけはひ、ただ、昔(注9)見たまひしもののけのさまと見えたり。

メモ欄

（注）８　調ぜられて――「調ず」は、ここでは祈禱によって退散させようとすること。
９　昔見たまひしもののけ―― このもののけは、以前にも光源氏の前に現れていた。

メモ欄

問１　傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 23 ～ 25 。

(ア)　いはけなくより　23
① かわいらしいので
② 幼いころから
③ 言い表せないほど
④ 他の子よりも

(イ)　なかなか　24
① かえって
② ひたすら
③ たちまち
④ 一斉に

(ウ)　呼ばひののしる　25
① 近づきながら悪口を言う
② 泣きながら恋い慕う
③ 大声を出して叫び続ける
④ 名前を呼んで祈禱する

メモ欄

問２ 波線部ａ～ｃの敬語の説明の組合せとして正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

①
ａ 書き手（作者）から山の座主への敬意を示す尊敬語である。
ｂ 山の座主から右大臣への敬意を示す丁寧語である。
ｃ 人々から大君への敬意を示す尊敬語である。

②
ａ 書き手（作者）から山の座主への敬意を示す尊敬語である。
ｂ 山の座主から大君への敬意を示す尊敬語である。
ｃ 書き手（作者）から大君への敬意を示す謙譲語である。

③
ａ 書き手（作者）から山の座主への敬意を示す尊敬語である。
ｂ 山の座主から右大臣への敬意を示す丁寧語である。
ｃ 書き手（作者）から大君への敬意を示す謙譲語である。

④
ａ 書き手（作者）から左大臣への敬意を示す尊敬語である。
ｂ 山の座主から右大臣への敬意を示す丁寧語である。
ｃ 書き手（作者）から大君への敬意を示す謙譲語である。

メモ欄

⑤
a　書き手（作者）から左大臣への敬意を示す尊敬語である。
b　山の座主から大君への敬意を示す尊敬語である。
c　人々から大君への敬意を示す尊敬語である。

メモ欄

問3　Aさんのクラスでは**【文章Ⅰ】**を読んだ後、それが**【文章Ⅱ】**の影響を受けて作られたことを学んだ。次に示すのは、二つの文章の共通点と相違点について、生徒たちがグループ内で話し合っている授業の様子である。これを読み、後の(i)〜(iii)の問いに答えよ。

生徒A――**【文章Ⅰ】**も**【文章Ⅱ】**も、もののけとそれに苦しめられている女性が登場しています。他に、「ただ、いまひとたび、目を見合はせたまへ」という言葉の一致など、表現が共通している点も見られます。

生徒B――そうですね。それに、「小さき童」が登場している点も共通しています。病の原因であるもののけを「小さき童」に移すことで、病人を治療する方法があったようですよ。

生徒C――たしかに多くの共通点がありますね。次に、**【文章Ⅰ】**と**【文章Ⅱ】**の相違点についても考えてみましょう。

生徒D――**【文章Ⅱ】**では、童に移されたもののけが［　X　］と言っています。

生徒E――自分の思いを伝えようとしているのですね。では、**【文章Ⅰ】**のもののけはどのような行動をとっているでしょうか。

生徒A――もののけは和歌を詠んでいるのではないですか。

生徒B――あれ、この和歌は「目をわづかに見開け」た大君が詠んだものではないのですか。

生徒C――和歌の表現から考えてみませんか。「朝夕こがす胸のうち」や「いづれの

メモ欄

かたにしばし晴るけむ」とありますよ。だから、これは［Y］と考えられます。

生徒Ｄ――なるほど、そのとおりですね。和歌の前後も考え合わせると、**【文章Ⅰ】**では、［Z］。

生徒Ｅ――**【文章Ⅱ】**に比べると、**【文章Ⅰ】**ではもののけをめぐる状況がずいぶん違っていますね。**【文章Ⅰ】**は過去の作品を取り入れながらも、独自の場面を作り出したと言えそうです。

(i)　空欄［X］に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［27］。

① まわりの者がみな自分を恐れて去ってしまったので、せめて光源氏には反省している気持ちを分かってもらいたくてこうして姿を現したのだ

② 妻のために自分に謝ろうとする光源氏を憎らしく思うのに、それでも光源氏への愛情は昔のままであることを知らせたくてここに来てしまった

③ 光源氏の妻がこのまま死んでしまいそうなほど苦しんでいる様子を間近で見たいので、長年続く恨みの心を持ったままここにやって来たのだ

④ 自分がもののけとなって取りついていることは知られたくなかったのに、光源氏のいたわしい姿を見過ごすことができずに姿を現してしまった

メモ欄

(ii) 空欄 [Y] に入る発言として最も適当なものを、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は [28] 。

① もののけの和歌で、退治される無念を詠んでいて、これ以上の祈禱はやめるよう頼んでいる
② もののけの和歌で、激しい嫉妬によるつらさを詠んでいて、それをぶつける先を求めている
③ 大君の和歌で、左大臣への愛情を詠んでいて、その思いをもののけに分からせようとしている
④ 大君の和歌で、熱にうなされる苦痛を詠んでいて、その原因が明らかになることを望んでいる

メモ欄

(iii) 空欄 Z に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 29 。

① 大君の顔つきが穏やかになって、右大臣は大君が一命をとりとめたと思っているけれど、左大臣はもののけがまだ取りついていることに気づいていますね。大君はもののけから解放されず、死を覚悟して出家を決意しています

② 大君の顔つきが苦しみに満ちたものになって、これほどまでに大君を憎むのは女君の仕業だと左大臣は気づいていますね。大君はもののけから解放されずに亡くなってしまい、右大臣は着物を引きかぶって悲しみに暮れています

③ 大君の顔つきが他の人に重なって見えて、右大臣と左大臣はそれが誰なのか怪しんでいるけれど、女君だとは気づいていないですね。大君はもののけから解放されて我に返り、苦しむ姿を皆に見られたくなかったと思っています

④ 大君の顔つきがまるで別人のようになって、左大臣は気づいていないけれど、右大臣はその様子がまさしく女君のものだと気づいていますね。大君はもののけから解放された後、正気を取り戻して気恥ずかしそうにしています

「大学入学共通テスト」２０２５年度本試験より（一部改変）

メモ欄

■2025年度 本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第４問（45）	1	23	2	5
		24	1	5
		25	3	5
	2	26	2	7
	3	27	4	7
		28	2	8
		29	4	8

■現代語訳

【文章Ⅰ】

比叡山延暦寺の座主［＝最高位にある僧］が、慌てて参上なさった。（大君の）御枕元に招き入れ申し上げて、右大臣が、両手を擦り合わせて、仏に物申すように、「ただ、もう一度、（大君と）目を合わせて［＝生き返らせて］ください。（子どもが）たくさんおります中で、どのような前世からの宿縁であろうか、幼いころからまたとなく愛しく思ってきました子を思うあまりに分別を失う親心の闇を、まったく晴らせません」と、泣き惑いなさると、（座主は）とても静かに数珠を押しもみなさって、（『法華経』の一節である）「令百由旬内、無諸衰患［＝周囲から衰えや患いをなくす］」と読みなさっている御声は、はるかに澄んで昇っていく気持ちがすると、（大君が死にそうに）変わっていく御様子が、少し回復して、目を少し見開けなさった。（周りの者は）全員、かえって慌てふためく様子で、「誦経をせよ、何々をせよ」とうろたえなさるけれども、やはり（大君は）正気の人とも見えず、御容貌も変わった様子で、本来の大君とも見えなさらない。とても美しくて親しみやすい感じがするが、嫉妬してそうな目もとの様子を、左大臣はそのように（憑依しているの）も分かりなさらず、父上［＝右大臣］が、とても不思議に思って、「思いがけない人［＝自分の妹・女君］にも似ていらっしゃるなあ」と理解しがたくお思いになると、（大君が）少し身動きをして

　さまざまに明け暮れ胸の内が焦げるように苦しい嫉妬の恨みを、どちらの姫君に（ぶつけて）少しの間晴らしたらよいだろうか

とおっしゃる様子は、少しもその人［＝大君］本人の様子ではなく、（妹である女君と）間違うはずもないのを、父大臣［＝右大臣］だけが、繰り返し繰り返し「不思議だ」と首をかしげなさる。

　そうして、（大君は）正気ではいらっしゃらないので、また亡くなりそうになりながら、まったく（この世に）留まることができそうにもいらっしゃらないのに、（座主が）「今はそんなに悪くはいらっしゃらないだろう」と（周りの人々を）静かに落ち着けながら、とてもかれた御声（での読経）はやめて、薬師如来の力によって病気を治す呪文を繰り返し読みなさると、御もののけは（大君から）現れ出て、（座主に）小さな童に乗り移らされた。（童が）大声を出して叫び続ける声に、（大君は）やっと正気に戻られたのであろうか、人々が（自

分〔＝大君〕を）見守り申し上げるのを、「みっともない」とお思いになって御衣をかぶって（顔を）隠しなさる。

【文章Ⅱ】

院〔＝光源氏〕も、「ただ、もう一度、（私と）目を合わせて〔＝正気に戻って〕ください。たいそうあっけなく臨終になってしまっているような時でさえ見ることができなくなったことが悔しく悲しいので」と途方に暮れなさる様子が、（院までもがこの世に）留まりなさることもできそうにないのを拝見する（周りの人たちの）気持ちは、ただ推測できるだろう。とてもつらい御心の中を仏も見申し上げなさるのであろうか、数か月間まったく現れ出てこないもののけが、小さい子どもに乗り移って大声を出して叫び続けるうちに、だんだんと（紫の上が）息を吹き返しなさるので、（光源氏は）嬉しくも不吉にも思われて動揺なさる。

すっかり（もののけは）祈禱によって（紫の上の身体から）退散させられて、（乗り移った子どもの口を借りて）「（光源氏以外の）人は皆去ってしまえ。院〔＝光源氏〕お一人の御耳に申し上げよう。私を、数か月間、調伏して苦しめなさるのが情けなくつらいので、同じことなら（この苦しみを）痛感なさるようにしようと思ったけれど、そうはいってもやはり（光源氏が）命が耐えられそうにないほど身を粉にして途方に暮れていらっしゃるのを拝見すると、今このようなひどい（もののけの）身をしているが、昔の心が残ってここまでして参上しているのだから、（光源氏の）気の毒そうな様子を見過ごすことができないで、とうとう姿を現してしまったことよ。決して（正体を）知られるまいと思っていたのになあ」と言って、髪を振り乱して泣く様子は、まさしく、（光源氏が）以前にも御覧になったもののけの様子だと見えた。